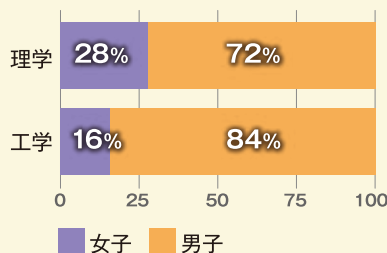


フェミニズムと私たちの生活は意外と身近につながっています。政治、メディア、労働、教育、家族など暮らしの中の様々な分野と関わっています。ここでは教育における「はて？」という違和感を、フェミニズムの視点でみていきましょう。

なぜ理工系に女子が少ないの？



出典：文部科学省「令和5年度学校基本調査」

2023年の4年制大学の進学率は、男子60.7%、女子54.5%でした^{*1}。1県を除いた都道府県すべてで、男子の進学率が上回っています。また、理工系学部に進学する女子の割合は、理学部約28%、工学部約16%と極めて低いのが現状です。

男女の教育格差や専攻学部によって男女の著しい偏りが生じる要因の一つとして、親や周囲からの**アンコンシャス・ジェンダー・バイアス**（性別に起因する無意識の決めつけや思い込み）があげられます。

例えば…こんな考え方

男の子にはいい大学に行っていい会社に就職してほしい。

女の子に理数系の科目は向かない。

女性は就職しても、結婚や出産を理由に仕事を辞めてしまう。

教育に限らず、私たちの生活の至る所にジェンダー・バイアスはみられます。「女性は家事・育児を担うべきだ」、「男性は家族を養ってこそ一人前だ」…こうした無意識の決めつけや偏見の多い社会では、人々は生きづらさを感じやすく、自己肯定感が低くなりがちです。

近年、一部の大学で理工系学部女子学生の人数を増やす取り組みが行われています。定員枠を女子生徒に限定するいわゆる女子枠の導入です。こうしたポジティブ・アクション^{*2}に対して「逆差別ではないか」、「女子だけ優遇されるのか」などという批判もありますが、女性差別撤廃条約では暫定の特別措置は差別にあたらないと明記されています。性別に関わらず誰もが「自分で選んで自分で決める」ことができる社会になれば、ポジティブ・アクションも必要なくなっていくはずです。

「なぜ？」の先にある未来

フェミニズムは、女性の地位向上はもちろんのこと、あらゆる性差別をなくし、性別によって不利益を被らない誰にとっても生きやすい道をつくることをめざしています。また、社会構造や制度、慣習などを批判的なまなざしで見られることを可能にしてくれます。

社会運動やデモに参加しなくても、身近な出来事にふと疑問を持つことから、フェミニズムは始まっています。

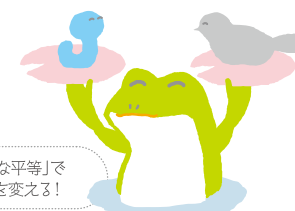
自分なりの“フェミニズム”を探してみませんか。
昨日までとは違う世界が広がるかもしれません。

^{*1} 出典：国立社会保障・人口問題研究所「表11-3 性別高等学校・大学への進学率：1950～2023年」
https://www.jpss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2024.asp?fname=T11-03.htm

^{*2} 社会的・構造的な差別によって不利益を被っている者に対して、一定の範囲で特別の機会を提供することなどにより、実質的な機会均等を実現することを目的として講じる暫定的な措置のことをいいます。

出典：男女共同参画局「ポジティブ・アクション」
https://www.gender.go.jp/policy/positive_act/index.html

【参考資料】●朝日新聞「女性の進学 消えない壁」（2024年5月5日付）
●朝日新聞「女性の進学とキャリア」（2024年8月25日付）



「みんな平等」で
社会を変える！